

古川 どうすれば漏水を防止ができるのか、皆目、分からなかったのだと思います。田辺さんは「水道はこうあるべきだ」という理想像をもっており、大変仕事には厳しかった、という記憶があります。笑顔なんてあまり見たことがなかったです。

—— 仕事に対しても、自分に対しても全てに對して厳しい方でしたね。ただ野球はお好きだった。八戸市の野球部は強かったです。

古川 いまでも都市対抗野球は伝統があるので、「どうせやるなら、都市対抗に出られるような強いチームにしよう」という気持ちがありました。仕事は仕事で大変だけれど、仕事が終わってからでも、チームワークという点では野球は最適だったのではないかと思います。田辺さんの考え方、「水道もチームワーク、野球のチームワークが必要」ということが根底にあったのでしょうか。

—— なるほど。ご自身の野球はどうだったのですか？

古川 大したことはなかったですが、メンバーでした。私が入った53年の秋の社会人野球の日本選手権がありました。東北で優勝し、甲子園球場で開催された第5回日本選手権に東北代表として出場しました。高校の時は甲子園に行けなかったが、社会人になって甲子園に行けました。

この甲子園での第1回戦の対戦が松下電器だった。「天下の松下」でしたから強かったです。5対0で負けました。社会人野球のチームには、公式に予算がでますが、我々はそういうものはありませんでしたが、一地方の役所チームで高いレベルの野球ができたというのは田辺さんのおかげです。

—— 厳しかったのが目に浮かぶようです。

古川 どうせやるなら、強くなれ、と。勝たないとダメだと。

### 最初の仕事は漏水担当

—— 仕事で当時思い出に残る話は？

古川 漏水防止を担当していた時のことです。当時は修繕を直営でやっていたので、非常時には、漏水担当の私たちも駆りだされました。夜間の緊急工事に立ち会っていると、近くの家から「寒いところごくろうさん」と声をかけていただいて、熱いお茶をごちそうになり、ああ水道というのはこういうところなんだ、と思いました。漏水

すれば修繕しなければならない、断水になれば早く修繕して給水しなければいけない。そうした中で声をかけていただきて、凄く大事な仕事なんだと感激したことを覚えています。

—— 水道の普及促進と同時に、管路が脆弱だった。昭和40年代から50年代はそういう時代でしたね

古川 今の八戸企業団のように、全部耐震管ということではなかったので、漏水もけっこうありました。昔の石綿セメント管やVPなど、弱いパイプはかなり漏水があって、現場で苦労した経験がありました。

また、道路管理者からの移設命令で水道管を早急に移設しなければならないときは、その時期と費用について予算がないということを説明して、道路管理者にも応分の負担をお願いする交渉もしたこともあり、貴重な経験でした。

### 末端給水型広域水道をスタート

—— 次に、八戸市水道事業から広域的な水道にするために企業団を設立するという発想は、どういう経緯からでてきたのですか？

古川 1975年（昭和50年）頃からです。私が入る前の頃から田辺さんがそういう構想をもっていたということは聞いていました。将来は広域的な水道にしないといけない、と。

—— 当時としては、大変、先駆的な発想ですね。

古川 幸い、八戸市の規模が大きくて、他の水道事業体は、比較的小さい町村だったため、八戸市が主導的に提案して、主導権を握ったというのが、まとまった大きな要因の一つです。同程度の



八戸圏域水道企業団・白山浄水場

自治体が複数あると、なかなか調整が厳しいというのはあるかもしれません。

—— そのことは理解できるのですが、現実に各市町村が保有している施設のレベルはかなりの差があったと思われます。更新しなければいけない施設だと分かって、それでも一体化する時の思想というのはどういう思想だったのですか。

古川 もともと、この地域の水道は、将来の水源が不安定だということがありました。人口が増え、水の需要も伸びていたため、水源の不安があり、共同で水源開発をしようということになりました。これも広域化の大きな理由の一つでした。水源については、2級河川の新井

田川の上流に世増ダムの建設計画があり、その計画に水道が参画して将来の水源を確保しました。

一方、当時、11市町村を網羅する広域圏でしたから、非常にエリアが広くて水道施設は古い施設が沢山あり、しかも点在していました。企業団がスタートしてから第1期拡張事業では国庫補助を受けながら、施設の統合を始めました。パイプラインも白山浄水場から、主要な配水池まで耐震送水管を整備し、平成22年度に終了しました。総事業費670億円の大事業でした。

—— 広域化事業を推進するにあたって、議会や住民の反応はどうでしたか？

古川 広域化に当たっては、料金の有り方が大きな問題になりました。たまたま八戸市は広域化した後、料金を上げなければいけないということが明かだったので、それまで値上げを抑えてきたということがあります。統合により、料金値上げしたところもあれば、値下げできた事業体もありました。

なぜ、周辺の事業体と広域化しなければならないのか、単独でいいのではないか、という意見もありました。それについては、将来的な水源の不足と一元管理した方が、お互いにとって合理的だということを説明し理解をもらいました。

### 大きかった県行政の役割

—— それは田辺さんのリーダーシップと、それに共鳴して果たすべき役割を自覚していた職員



水道の使命を語る古川 勲氏

の踏ん張りによるものですか？

古川 当時も、青森県庁の水道行政担当部局にも優秀かつ熱意がある方がおられ、県としても力を貸してくれました。広域化促進協議会を作った時も、県からバックアップしていただいてスタートすることができました。当時は、県の援助、指導が大きかったです。

今後の水道を考えると、国や県のリーダーシップと事業体の頑張りで、将来に水道を考えなければなりません。

老朽施設がどの事業体でも問題になっており、その更新には莫大な費用がかかります。国としては補助を考えていただけるでしょうが、県の指導力も大いに期待しています。

—— 今回、水道補助金が増額されましたが、交付金の占める割合が大きく、都道府県で交付金の取り扱いがどうなるか、不安がありますね。

古川 そうです。老朽施設の更新等には多額の費用が必要です。料金収入の減少で更新がなかなか進まないこともあります。財源は多いほど助かります。また、新水道ビジョンの柱である持続の一つの方法として、現在私どもは平成20年1月に立ち上げた北奥羽地区水道事業協議会で、いろいろな連携を始めています。青森県南と岩手県北の21事業体で構成しておりますが、4つの共同化をテーマとして、それぞれの施設の確認や研修会等を行っております。

(続く)